

ネット型球技における用具づくり

吉本忠弘

甲南大学 スポーツ・健康科学教育研究センター
神戸市東灘区岡本 8-9-1, 658-8501

Abstract

The purpose of this study was to report a sports facility made by author at the “net type sport”. This praxis was carried out Indiaca for the recreational sports.

More practical information is required for teachers to improve their teaching. I hope that the findings of this study could contribute the teachers for their physical education classes.

キーワード： ネット型球技, 用具作成, インディアカ, 屋外

1 はじめに

体育教師にとって、授業で用いる用具・器具（以下、用具と表記する）の管理は重要な任務となる。それらはボールの空気圧管理、破損したマットの補修といった施設のメンテナンスに止まらず、指導装置（instructional device）[1]に代表される教具の用意なども含まれる。スポーツを行う上で用具は不可欠であり、この管理は授業の前提条件となる。

しかしながら、体育授業現場においては、用具を購入できないケースや、施設の都合によって実施種目に制限がかけられるケースが頻繁に生じる。このようなケースは体育授業において教師を悩ますものとなるが、独自の工夫によって事態の改善を試みた事例も存在している。例えば、高瀬[2]らは、小規模校の小学生を対象としたベースボール型の授業実践を紹介している。この研究では通常のベースボール型の種目を行うのに必要な人数が揃わない状況下であっても教師の工夫次第で授業を行えることが示唆された[2]。このような「工夫」に関する事例研究が体育授業の発展に大きく貢献してきたことはいうまでもない。もちろん、充実した施設で何不自由なく授業を行えるに越したことはないが、「一見すると不可能かと思われるような状況下」で工夫を施して実施された授業事例は、体育授業研究の発展に寄与するものと考えられる。

本研究は、屋外でインディアカを行うために施された「用具の工夫」に関する事例を報告する。具体的には、人工芝のグラウンド上にネット（境界線）を設置するために作成した用具の紹介ならびに作成方法を紹介する。これにより今後、屋外でネット型球技を行う際の授業づくりへの寄与を期待する。

2 用具作成事例

1. 授業実践の概要

本研究で事例報告の対象とする授業は2018年度に甲南大学の基礎体育学演習におけるフィットネス&レクリエーションスポーツにおける1時間である(注1)。この授業におけるフィットネス領域では基礎的な体づくり(なわとび, 腕立て伏せ, 腹筋)を行い, レクリエーションスポーツの領域では, 巷間でレクリエーション目的として広く行われているスポーツを実施し, そのルール, 基礎技能について学習することをねらいとした。

2. レクリエーションスポーツの教材

レクリエーションとは, 近代英語名辞Recreationを日本語表記した言葉であり, Re(「再び」を意味)とcreation(「創造」を意味)から構成される言葉として意味づけられる[3]という。このような語源から15世紀以降に娯楽や楽しみごとによって自己回復する行為であるという今日的な意味を獲得した[3]とされ, 今日ではレジャー, 余暇やバカンスとも関連を持つ用語[4]として認識されている。このような解釈を踏まえると, 「レクリエーションスポーツ」といった場合にはスポーツによって自己回復を図る行為と理解することができ, その意味に基づくマイネルが述べている「Bewegungen als Mittel …zu seiner Freude und Erholung」[5], 「人間の楽しみや気晴らしの手段としてのスポーツ」[6]がその本質をついた名称であると理解できる。

以上のことから, 「体育授業においてレクリエーションスポーツを指導する」といった場合には先ずもって, 当該スポーツの実施によって学生自身に気晴らしをする体験を積みませ, それを土台としてその技術, 実践に関する段取りなどの知識を指導することが望ましいと考えられる。

3. インディアカの扱いと実施の方法

本授業で取り上げたインディアカは2つのチームが羽根のついたボール(インディアカ)を, ネットを隔てて手で打ち合うラリーゲームである[7]。インディアカはドイツの体育教師であったKarhans Krohnが1936年に, ブラジルのコパカバナを散歩していた際にブラジルの「ペテカ」を発見し, それを故郷に持ち帰った[8]のが起源であるという。「ペテカ」の原型はおそらく, インディアン部族の研究者が北ボリビアで発見した「トウモロコシの葉を束ねた古代の羽根つき遊び」である[8]とされ, Krohnはインディアンとペテカの合成語として「インディアカ」という名称を用いた[8]。インディアカは, わが国では1968年ごろに始められたが本格的には1970年代に入ってから普及しはじめた[7]という。「インディアカは羽根のついたボールを直接手で打ち合うため, 年齢・性別を問わずだれでも容易に行えるゲームである。羽根のついたボールは打ち方によってゆっくりと跳ぶことから, 初心者はラリーを続ける楽しさがある」[7]といい, 通常はバドミントンのダブルスのコートに男子および混合200cm, 女子185cmの高さでネットを張って行われるが, 技能や年齢, 体力などを考慮して高さを変えて行うことができる[7]。

上述したように本授業ではどのようなスポーツを行うにしても, スポーツを苦手としている学生が当該スポーツに対して少しでも親しみをもち, 「スポーツによる気晴らし」を実感できることを目的としていた。そのためには, インディアカを実施する際にも学生たちの「気晴らし」に適した条件で実施する必要がある。これにあたり以下のように, 通常のインディアカとは異なる条件が考えられた。

- ①学生間の技能差を考慮に入れてネットの高さを低くし, コートの大きさも狭くする。
- ②体育館で行うよりも開放感のある屋外でインディアカを実施する。

①に関してはスポーツを教材化する際には校種を問わず, ごく一般的におこなわれている工夫である。本研究で取り上げるのは②に関する工夫である。本授業において屋外でインディアカを行うに至った経緯として, 以下の二点が挙げられる。一つ目は, ある日の授業開始前に人工芝の

グラウンド上で寝転がっている数名の学生が散見されたことである。このようなことから人工芝のグラウンドは、学生たちにとって「寝ころべるほど親しみを持ちやすい場所」と考えられた。

二つ目は授業担当教員によるビーチバレーボールの実施経験に起因する。本授業を担当した教員はかつてドイツに留学していた。その際に一週間に一回のペースでビーチバレーボールを実施していた。それまでビーチバレーボールの経験が全くなかったために最初は苦労が絶えなかったが、柔らかい砂の上で思いっきり転びながらボールを追いかけた経験は、体育館で行ったバレーボールの体験とは大きく異なるものであった。当該教員は元来、球技が苦手であったが、「屋外で柔らかい砂の上」という開放感あふれる空間で行う時間は、毎週の楽しみであった。

以上のことから、インディアカにおいても、体育館で行うよりも屋外で行う方が、気晴らしとしての効果が高くなるのではないかと考え、屋外の人工芝のグラウンド上で実施した。なお、本研究では屋外で行う場合と屋内で行う場合の良し悪しについて比較考察することを目的としていないため、以下では、屋外でインディアカを行うために施された工夫について紹介するにとどまる。

4. 屋外で行う場合の難点

インディアカに限らず屋外でネット型ボールゲームを行う際にはネットを設置するための特殊な器具が不可欠となる。体育施設の中にはグラウンド上にテニスやバレーボールの支柱を設置するための設備を有している場所もあるが、本授業を行う場所はサッカーやラグビーの実施を想定して設計されているため、グラウンド上に支柱を埋め込む設備は存在しない。それゆえ、このような場所でインディアカを行うには、筆者が独自にネット（境界線）を作成する必要がある、図1のような用具を作成した。

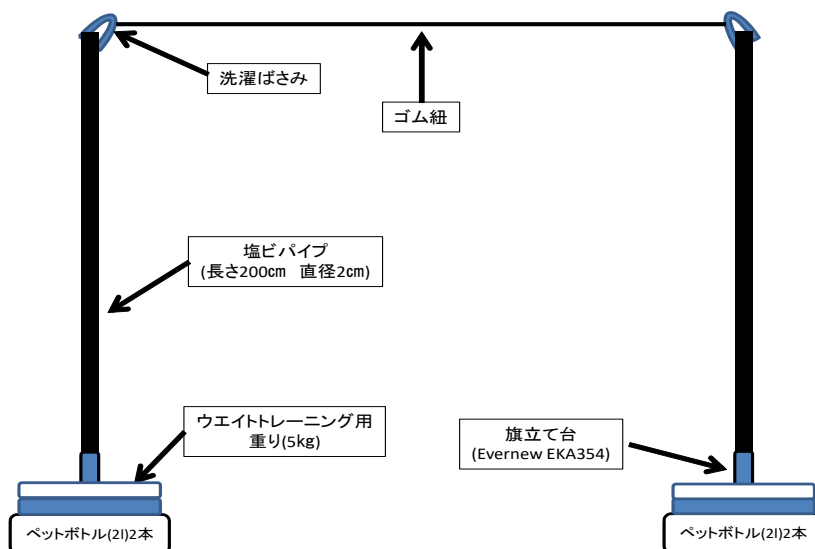


図1：簡易ネットの全体図

今回作成された用具の寸法について支柱部分は量販店で購入可能な硬質ポリ塩化ビニル管（以下、塩ビパイプと表記する）（長さ200cm、直径2cm）を市販されている旗立て台に差し込み、その土台部分には水を満入れた2リットルのペットボトル2つを紐で縛り付けた。2本の支柱をゴム紐で結び、それぞれの上端部は洗濯ばさみで接合した。なお、試作した段階で両支柱が大きくしなり、転倒の危険性を感じたことから、旗立台にウェイトトレーニング用の重り5kgを乗せることにした。ゴム紐の長さとお太さは使用するコートのお大きさによって決定すべきであるが、どのような長さにしても図2のように中央部分には若干のたるみが生じた。



ネット(境界線)の設置例

ゴム紐と支柱の接合部分

土台部分

図2：作成したネット（境界線）の使用風景

ネットに関しては図1ならびに図2のようにして作成可能であるがコートに関する境界線に関しては、サッカーなどで用いられる地面上の目印などを等間隔に設置した。

5.授業の様子

本授業では1チーム5名（欠席者のいるチームは4名）で構成し、コート内のプレイヤーは4名とし、コート外にいるメンバーは得点係を兼ねることとした。なお、ローテーションの際に1名を入れ替えて行うため結果的には5名全員がプレイに参加することになる。

学生たちは、ゲーム開始当初、屋外で行うことに伴い、ボールとの距離感をつかむのに苦労をしていたが、練習ゲームを経て総当たり戦（4チーム総当たり）を行う際には、慣れてきた様子であった。ゲームの勝敗決定の仕方については、1ゲーム6分とし、6分間でより多くの得点を獲得したチームを勝者とした。このような勝敗決定の方式を選んだ理由は、限られた授業時間内で複数チームの試合を一気に行わねばならないことにある。本来、インディアカはバレーボール等と同様に15点を先に獲得したチームを勝者とするゲームであるが、チームのレベル差によっては早期に決着がついてしまい、他のチームの試合が終了するまで待ち時間が生じてしまうことが頻繁に生じる。このような状況は授業マネジメントの観点からも望ましいものではないため、両チームが同じ時間でゲームを終える形式でゲームを行うこととした。

使用した用具に関しては、転倒などの事態は生じなかったが、ゴム紐を境界線として用いていることから、時に羽根が「ゴム紐の上を通ったのか、下を通ったのか」判断に困ることがあった。このような場合は、ノープレイとしてプレイのやり直しを行うことで対応した。ゴム紐を太くすれば支柱にかかる負担が大きくなり、転倒などの危険性が高くなる。このような事態の改善に向けては、適度な柔らかさと軽さを兼ね備えた紐が必要になる。これに関しては今後の改善課題としたい。



図3：青空の下で行うインディアカ（丸印は羽根の場所を意味する）

3 おわりに

本研究ではレクリエーションスポーツとして屋外でインディアカを行うための用具作成事例を紹介してきた。作成された用具の土台部分をなす旗立て台こそ市販されている物を用いたが、それ以外は全て手作りで作成することができた。このような授業を通して、学生たちは屋外でインディアカを行う楽しさを実感するだけでなく、「工夫次第では身近な物を利用してレクリエーションスポーツを楽しむことが可能である」ということを感じられたのではないだろうか。

今後も授業を行う場に様々な工夫を凝らし、より充実した授業実現を目指したい。

注

1) 本論の執筆にあたり、本授業実践を行う前に学生たちに対して「本日の授業を撮影すること」「撮影した写真を論文で使用すること」ただし「顔などが鮮明に映る写真や本人が特定に繋がるような記述は一切行わない」ことを説明した。これらに関しては学生から同意を得ている。

参考文献

- [1] 高橋健夫編，新版体育科教育学入門，大修館書店，p.52，2010.
- [2] 高瀬淳也ほか，極少人数学級における状況判断力の向上を目指した授業実践：ベースボール型の授業から，北海道体育学研究（53），pp.27-37，2018.
- [3] 小田切毅一，レクリエーション（最新スポーツ科学事典，平凡社，p.847），2006.
- [4] バイヤー.E編，朝岡正雄監訳，スポーツ科学事典，大修館書店，p.527，2001.
- [5] Meinel, K., *Bewegungslehre*, Volk und Wissen volkseigerer Verlag Berlin, s.93, 1962.
- [6] 金子明友，スポーツ運動学，明和出版，p.30，2009.
- [7] 清水良隆・紺野晃編，ニュースポーツ百科，pp.34-35，1997.
- [8] Deutscher Turner Bund (DTB)，<https://www.dtb.de/indiaca/>（参照日2020年1月10日）.